生きもの共存の畝間から(6)

雑草を観る、育てる

徳野　雅仁

いつのころからか、畑に入ってまず目がいくのは、野菜ではなく、爽やかな雑草の緑や、昆虫の活動ぶりであることに気づきました。天敵が数多く確認できれば虫害の心配はなく、雑草がのびのびと元気に育っていれば草花や作物も健康に育つからです。こうしていつも、畑を見渡し、日々、変化する雑草の美しさをのんびり眺めることが、私にとって穏やかなくつろぎの時間になっています。

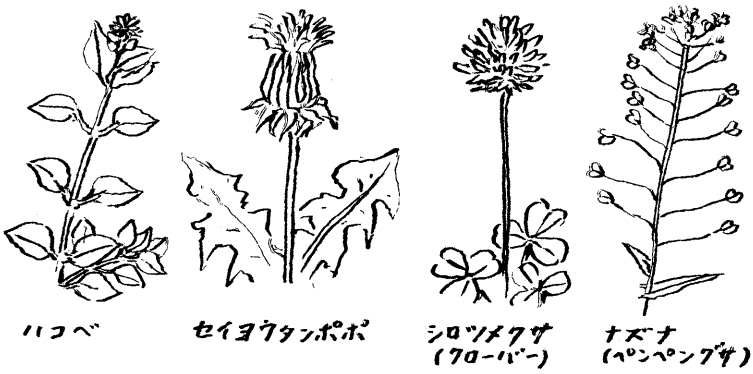
わずか十坪弱のミニ農園ですが、野菜、ハーブ、果樹、花木、草花がところ狭しと育つなか、ススキをはじめとしたさまざまな雑草が作物や草花とほどよく調和し、緑の世界をつくっています。

十月。夏草が色づきはじめるころ、秋野菜が育つ株元や、収穫を終えて整理され、土が露出した畝上には、新しく芽を出した雑草が、次々に誕生しています。ホトケノザ、ハコベ、カラスノエンドウ、オオイヌノフグリなどです。秋は除草はまったく不要です。冬にむかって作物はどんどん大きくなりますが、雑草は大きくなりません。寒さに負けないように生長を止めて身を低くし、越冬準備に入ります。作物がいかなる雑草にも負けないのはこの季節です。身を低くして雑草は、大地を覆い、霜害や北風を防ぐ体制をとります。ハコベに似たノミノフスマは、一株で直径一メートルの放射状に、大地に張りつくように枝を伸ばし、広く畝上の他の作物の株

元まで守ります。これらの雑草が上にむかって生長するのは春になり花期を迎えるころですから、除草の必要はなく、むしろ、土壌の乾燥や、寒害、そして病害の発生から作物を守ってくれている点に注目したいと思います。

自然農園では、何が芽生えるかも楽しみのひとつです。なかには、風に乗って運ばれてきたもの、鳥が落としてくれたもの、また、地中で眠っていたものが時を経て芽を出すこともあります。見覚えのない芽を見かけたら摘みとらずに育ててみると、それが美しい花を咲かせるヌマトラノオであったり、ホオズキであったり、また、サンショウやユズやムクゲやヤマザクラであったりと、おもいがけない出会いがよくあります。

雑草は子どものころ、一番の遊び相手でした。カヤツリグサやナズナ（ペンペングサ）、エノコログサ（ネコジャラシ）。葉を細かく裂き、髪を結んで遊ぶカモジグサ。穂を結んで茎を通し合い、互いに引き合って遊ぶオヒシバの相撲遊び。クローバーで花輪をつくり、枯れたアカザの茎でつくるとても軽い息災長寿の杖など、夢や想像力を育んでくれたものです。

子どもたちが野菜を育て、収穫する喜びを体験しながら、雑草を通じ、自然との触れ合いによって何かが心に残ってくれるのではないかと思っています。

（イラストレーター　イラストも筆者）